

口舌

「自分で箸をとる」に当って注意すべきことの一つに口舌（ものの言い方）がある。言葉は人間関係におけるコミュニケーションツールとして欠かせないものであり、人は無意識のうちに言葉をもって関係性を保っている。その言葉は「言霊」と言われるように、心の表現手段であり、かつ人格を表すものでもあるから、片言隻語といえどもこれを妄りにしてはならない。

渋沢栄一は、「ひとたび口にして言う以上は、必ず心にもないことは言わぬという主義である。（中略）口舌は実に禍の起る門でもあるが、また福祉の生ずる門でもある。ゆえに福祉のくる為には多弁敢て悪いとは言われぬが、禍の起る所に向っては言語を慎まねばならぬ。片言隻語といえども、決してこれを妄りにせず、禍福の分かる所を考えてする」（「口は禍福の門なり」『論語と算盤』所収）と戒めている。

人は、よく知らない事柄でも我が物顔に断じたり、とても出来そうもない難業を敢えて出来ると言ってみたり、他人を不当に罵るなど、時として出過ぎた失言をするものである。これらは皆、自分の存在を誇示しようとする虚栄心から生じるのである。

単なる一時一場の放言であれば、周囲に人たちの物笑いとなって済まされもするが、約束の次元にまでなると事は重大になる。「駟も舌に及ばず」（注1）と昔から言われているように、どんなに軽はずみな底意のない発言でも、受け取られ方によっては大きな問題となることがある。

筆者が秘書をしていた時、「一言で言え」との訓育を受けた。

「初めに報告か、連絡か、相談かを言い、次に結論を言え。何となればという理由は必要があれば聞くと申渡され、以後そのように言動を注意したものである。仮に善意から発する場合でも、言葉数が多すぎるのは疎ましく思われる。多弁と冗長には売り込みの要素が混じり易く、何を言いたいのかと理解に苦しむことが多いからである。また、このような場合の言葉は誇張に走りやすく空虚となり、型通りの措辞は興醒めとなる。さらに、繰り返しの多い言葉は、相手の理解力が浅く、愚かに近いと嘗めてかかっていると思わせる。

表現が無用に長くなる（だらだらと話す）理由はいくつかある。一つは、伝えたい内容の核心を掴んでいない場合である。論理的に整理できず、かつ語彙力が乏しいために生じる現象である。これに加えて、多弁を弄していれば先方が何とか察知してくれるであろうという甘えが生まれると、相手をイライラさせてしまうことになってしまう。

二つ目は、計画的に相手を疲れさせ、騙そうとする場合である。真意を察知されないように出来るだけ華やかに言葉を飾るのである。しかし、そのうちに腹の底を見透かされ追い立てられ、結果的に信用を失うことになる。

三つ目は、伝達する内容への感情移入があまりにも度が過ぎるため、ひたすら自己陶醉に耽る場合である。この場合、自分の頭の中にあることをすべて話したい、自分の心の中にあることをすべて相手に理解してもらいたいという欲求が強く出るのである。これは相

手の迷惑になるばかりであって、結局は伝えたいことを伝えきれないままに終わることになる。

四つ目は、自分の本心や本質を見透かされないために防壁を張る場合である。自分に自信がないことが根本にあり、それ故に、相手の言葉の一つを捉えて常に話題を変えようとする。これでは深い議論も出来ず、真の友人も得られない。

渋沢栄一は、「自分が信じぬことは言わず、知った以上は必ず行うという念が強くなれば、自然に言葉は寡黙になり、行動は敏捷びんしろうになるものである」（『渋沢栄一訓言集』P221 竜門社編 国書刊行会）と言っている。偽りのない緊密な付き合いには、煩わしい言葉を必要としなくとも正確に以心伝心が出来るものである。日常の言語に気をつけ、かりそめにも嘘偽りを言わず、不言実行あるいは有言実行（注2）は本人の努力次第で出来ることであるから、これを習慣づけるように努めることが肝要である。また、世の中には短く要約出来ないものはないから、キーワードを探し、一言で内容を伝えるように日頃から訓練しておくことも大切である。

注1：一度口から出してしまった言葉は、仮令たといどんなに悔やんでも取消すことが出来ない。したがって、言葉には十分気をつけろということ。出典は『論語』。

注2：有言実行とは、言葉を実行のエネルギーに変換する作業である。自分の発した言葉が“言霊”となって自分に返ってきて、自分の中に木霊し、実行するエネルギーとなる。また、自分に対する約束という責任感で自分を縛り、物事を完遂する力となるからである。